府中ホスピスを考える会通信　第18号　2013／10／19

終末期の訪問看護ケア・在宅療養とホスピス医療の充実を

府中ホスピスを考える会・会長　駒ヶ嶺泰秀

平成13年に「ホスピスを考える会」を作り、「ホスピス」とは何かという勉強を続け、多くの著名な先生に来て頂き講演会を持ちました。
しかし何時までも勉強だけでは埒が明かないという反省から、「府中にもホスピスの核となる施設を」という願いをこめて、市長と議会宛に請願署名運動を展開しました。21年のことです。
その結果9千数百名の方の賛成署名をいただくことが出来、市長と議会に提出しました。
その年の議会を無事通過し、やれやれと役員一同喜びに浸ったものでした。

しかし私たち会員の願ったような展開にはなりませんでした。
その理由のひとつとして、市としては新しい箱物施設は作らない、という方針があり「府中ホスピスを考える会」への援助はするが、全面的に引き受けて事業を進めることはしない、という回答でした。
そういう状況の中で運動が低迷してきました。
その間にも私の身の回りの方で、がんで亡くなってゆかれた人が何人もおります。また今がんで治療中の方もおられます。
世の中はがんに対する考え方が10年前とは大分変わってきました。
府中でも終末期にある患者さんへの訪問介護（ケア）制度があり、利用されています。
在宅による「看取り」（掛かりつけの医者が必要）も少しずつ広がってきました。
「がん」の末期は激しい疼痛を伴う、というのが常識のようでしたが、今日ではホスピス的医療の進歩によりほとんど苦痛を感じさせない「看取り」が可能になってきたようです。
しかし問題なのは独り住まいの高齢者の場合です。訪問看護（疼痛ケア）は受けられますが、いよいよ病状が悪化し、独りでは日常生活が出来なくなった場合のことです。
どうしても施設に入って疼痛緩和ケアを受ける必要があります。
そこで下のような組織が必要になります。
訪問看護　⇔（在宅療法）＝終末を迎える場所　のネットワーク作りです。
すでに手遅れの末期〈がん〉だと知らされた時、あなたならどういう生き方・終末を選ばれますか？と私は問いかけたいと思います。
あなたのご意見・ご感想をお寄せください。
この紙面で折々紹介してゆきたいと思います。

「府中ホスピスを考える会」が目指しているもの　～　小金井、小平を歩いて

三宮　克己

平成21年11月24日、市民約1万人の署名を付けて提出した「府中市にホスピスを設置するための陳情」は市議会で採択されましたが、実現に至らず23年3月に廃案になりました。
平成25年の現在まで野口前市長と高野現市長にそれぞれ会役員一同が面談、説明をしてきましたので、改めて当局の検討を待ち今日に至っています。
私たちは法人組織のような財源を持っているわけではなく、病院を建てる力はありません。

当時せいわクリニック朴先生に、「在宅療養施設」でがんに限らず、すべての緩和ケアを必要とする患者に在宅のまま巡回医療を行う、という構想がありました。
府中市内の用地に（必ずしも交通至便は必要とせず、巡回に出かける拠点であればよい）コンビニ程度の広さの3階建てを造り、一階をせいわクリニックの診療所とし、神経内科、麻酔科など三、四人の医師の協力を得て重症患者を重点的に受け入れる。二、三階は独立したケアマネジャー組織の運営にして、病床6床（4人部屋1、個室2程度）とし、老老介護者の休息所にも当てることを考えていました。
これは在宅療養支援診療所「ケアタウン小平クリニック」山崎章郎先生の構想で、すでに実現運営中の組織に類似して、私どもの目指す参考例になっていました。
会が陳情署名運動を始めた頃は「ホスピスはお金が掛かりお金持ちしか入れない」と言って、有料老人ホームのような誤解から署名を断られることもありました。
ホスピスの費用は健康保険が適用されます。

小金井の聖ヨハネホスピスでは

日数	30日まで	60日まで	61日以上
一日当たり入院料	48，010円	43，010円	33，010円
1割負担	4，801円	4，301円	3，301円
3割負担	14，430円	12，903円	9，903円
食事代（一食）	260円	210円	160円

一ヶ月大体110，000円から特別個室で450，000円とのことです。

ケアタウン小平クリニック（山崎章郎院長）に併設されている「いっぷく荘」では2，3階が賃貸ワンルームアパートで食堂、展望風呂、図書室などの学習室もあります。
ケアタウン小平クリニックの在宅療養支援診療所は一階にあります。
住み慣れた自分の家「いっぷく荘」で個人の趣味や隣近所の人々との交流など、人生を味わいながら必要なときクリニックで診察を受けられます。
ここでの費用は一人住まいの場合、3 食付で１ヶ月197，000円です。
なお地域の在宅療養支援は、ケアタウン小平を中心に5キロ以内を巡回、療養支援に当たっています。

やさしく学ぶ緩和ケア入門レポート（10月12日　於府中の森芸術劇場）

戸田　伸一

オレンジ色の風船をロゴに用いている「緩和ケア普及啓発運動」の支援を受けて、2013 年 10 月 12 日、府中の森芸術劇場で「誰でもよくわかるやさしく学ぶ緩和ケア入門」という二つの講演、小グループ討論、緩和ケアよろず相談が市民参加型学習会として行われました。

主催者は在宅医療・緩和ケアカンファレンス(西部)とNPO 法人臨床研修支援協議会でした。府中ホスピスを考える会会員 20 名が出席しました。予告期間が短かったことや、別の大きなイベントが平行して開催されていた為に出席者は関係者を除いて 40 名程度でした。

司会者は多摩総合医療センターの包括的がん医療チームで緩和ケア的医療を行っておられる芝裕信 Dr.、I は杏林大学医学部麻酔科教室（がんセンター緩和ケアチーム専従医）の窪田靖志 DR.、II は府中医王病院訪問看護ステーションの安瀬弘子看護師でした。関係者には多摩総合医療センターの医師、ソーシャルワーカー、その他府中市医師会や歯科医師会から代表が参加されました。

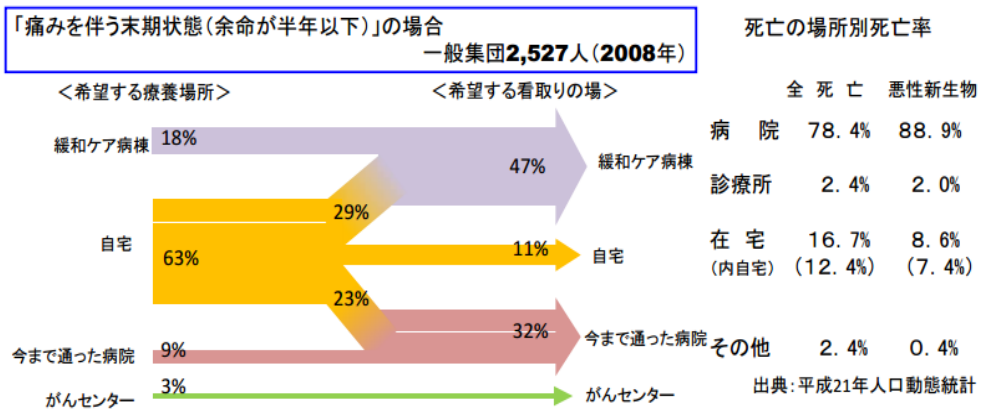
当日の関係者は日本緩和ケア医療学会が掲載している緩和ケア病棟のある病院に属しておられる先生方ではなく、限定された環境の中で、ご自分なりのご判断で緩和ケア問題に取り組んでおられる方々とお見受けしました（平成 25 年度厚生労働省委託事業としての緩和ケア普及啓発事業は、がん患者のケア（のみ）を重点的に取り上げているのに対して、本日の講演趣旨は、少々異なっていました）。

1．講演Ⅰ（窪田靖志DR. ）緩和ケアとは、手入れ、世話、介護などの意味をもつ英語と、緩めて和むという漢字を組み合わせて作ったものである。
患者は様々な病気になると、治療費や公的支援などの相談事や、身体の不快な症状の解決に翻弄される。
緩和ケアは、医師のみならずソーシャルワーカーやケースワーカーの助けを借りて、治療にあたることになる。
麻酔医として専門の麻薬を使用することへの問題について吐き気や痛みを止める為に麻薬を治療に使うことが多いが、アヘン戦争のイメージが今も残っていて、誤解を受けている面が多々ある。
従来の抗がん剤のみの治療から緩和ケアへ移行しつつあることは、包括的がん医療モデルが重層的に相互にかかわりあって全人的な苦痛の緩和（精神的や心の苦痛も含めて）へと進みつつある。
麻薬を医師の指導の下に使用して中毒症状になったケースは0.2％以下，幻覚などは5%以下である。麻薬使用量と予後との相関はない。手術中の補助、術後の鎮痛、慢性的な痛みにはパッチ剤や錠剤、内視鏡検査の際の痛みの軽減、がんの痛みや呼吸困難の緩和など肝臓、腎臓への悪影響も無く使用されているので、安心して頂きたい。
2．講演Ⅱ（安瀬弘子看護師）「切れ目のない緩和ケアの提供」という題で話をしたい。緩和ケアという言葉は 2002 年 WHO が次のように定義しました。

『緩和ケアとは、生命を脅かす疾患による問題に直面している患者とその家族に対して、 疾患の早期の痛み、身体的問題、心理社会的問題、スピリチュアルな問題に関して、 きちんとした評価を行ない、それが障害とならないように予防し、対処することで、クオリティ・オブ・ライフを改善するためのアプローチである』

この文は「がん」だけを取り上げていないことは読み取れますが、国が定義する緩和ケアは「がん」のケアに関連していることが殆んどです。平成 22 年度に出された 2,527 人のデータで統計に痛みを伴う末期症状（余命が半年以下）の場合、患者の希望する療養場所について尋ねていますが

希望する療養場所について



出典：平成２２年度　がん対策評価・分析事業

63%の患者が自宅での療養を希望しながら、余命が半年以下の状況になると緩和ケア病棟に入る人が 47%、通った病院へ戻る患者が 32%で、結局自宅で亡くなる人は 11%に過ぎない。
「がん」（悪性新生物）患者の場合は病院や診療所で 90.9%が亡くなり、自宅では 8.6%になっている。訪問看護師の立場でいうと、この状況からもっと自宅医療や緩和ケア設備と自宅との往復により、終の棲家である自宅を最後の場として迎える事が出来るように努力して行きたい。特に、余命が半年以下と告げられた患者に対して、切れ目のない質の高い緩和ケアを提供できる体制を出来るだけ早く府中市でも実現したいと話を結ばれました。

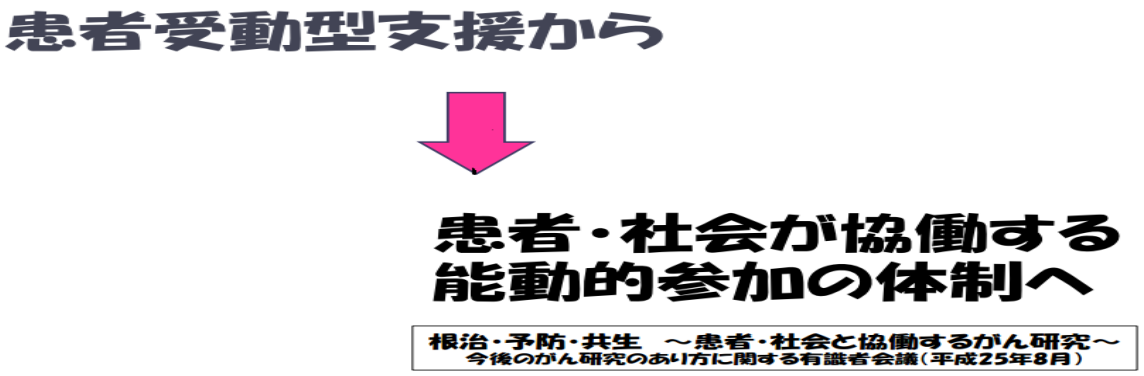
二つの講演の後、小グループ討論が行われました。
会員は数人ずつ別れて医療関係者と参加者の仲間に加わり、先ほどの話について討論を行った。討論中に出た質問は、府中市に現在、緩和ケア設備はあるかとの問いに芝医師から、現在はないが、今回の集会を機に作り上げるよう考えたいとのアドバイスがあった。討論後の報告として、現在通院している病院が自宅より遠い場合、どうしたらよいかとの質問に対して、通院中の病院に属するソーシャルワーカーやケースワーカーから、将来近くに出来る緩和ケア施設と連絡を取る仕組みが出来るという返事があった。

その後、緩和ケアよろず相談が行われ、医療関係者（杏林大学病院、多摩総合医療センター、府中市医師会・歯科医師会の出席者、ソーシャルワーカー、ケースワーカー、ケアマネジャー、看護師、薬剤師）との個別面談が行われた。

同日、午後２時から中央文化センターで「府中ホスピスを考える会」の幹事会を開催しました。
出席者;駒ヶ嶺、市村、荒川、平松、市原、武智、戸田（記）4時より西原幸一市会議員が出席。
駒ヶ嶺：上記の「希望する療養場所」の図にあらためてショックを受けた。自宅治療・緩和ケアの問題を促進せねばならぬと思った。10月17日に市が開催する「在宅医療環境整備協議会」について会員への紹介。4名出席決定。
市原：あれだけのスタッフを集めての集会は初めて経験しました。
平松：小グループ討論会に出席して、身近に悩みを聞いて切実感を感じた。
西原市議：医王病院で新規に併設される緩和ケア設備についてのいきさつを説明された。
武智：緩和ケアなどの資料はインターネットで収集できるが、府中市での実行は、これからが問題。
戸田：大型病院での緩和ケア設備が出来たとしても個人の自宅医療へつなげる受け皿がないと考える。市民が行動してこそ具体的な成果につながる。今回の集会に市の医師会・歯科医師会からどの様な方が参加したのか情報が欲しかった。今後の体制つくりに協力してくれるのか否か、確かめる必要がある。

残念ながら、国が提唱している緩和ケアは「がん」対策の一環である。
しかし、10月17日に市が開催する「在宅医療環境整備協議会」の主催は健康推進課長の横道淳子氏であり、高齢者支援課との協調で行われるなど、国の方針の先を行く考えが出ているので、終末期も問わず、かつ病名も問わないと思われる。
在宅医療のあり方についての新しい動きに大いに期待したいと思います。

「府中ホスピスを考える会」の名称を変更する件について、ホスピスという言葉はイメージが誤解されがちなので、「在宅医療・緩和ケアを府中で実現する会」などを考えたら如何かと提案しました。
以下は報告書の作成に際して調べた、厚生労働省の「平成25年度　第40回がん対策推進協議会」資料に書かれていたロゴを引用します。府中市と市民との間で真にこのような協働が実現できればと心から望みます。



患者と家族で語り合う集い

7月7日　於　グリンプラザ内　サングリア
武智　一雄

7月7日世話人会の後、初めても試みとして「患者と家族で語り合う集い」がもたれました。
考える会の運動を外に広げ、患者やその家族とテーマを決めずお話をする、と言う趣旨で集いは開かれました。呼びかけの不十分さがあり、会員以外の参加は2名にとどまりました。
その方たちから「考えていた集まりとは違っていた」、「（会員の）話についていけなかった」などの意見が出されました。「集い」の目的・進行をはっきりさせず、参加者へ耳を傾けることなくいつもの内輪話に終わったのではないでしょうか。
次回は会員が一歩引いて参加者をお迎えしたいと思います。

平松　ふじ子

私たちの打ち合わせ不足のために、参加していただいた方々に十分納得がいく会にはならなかったように思えます。今回のことを反省して、今後は参加された方々のお気持ち寄り添えるような会作りが出来るように努力して行きたいと思います。
二回目以降もたくさんの方のご参加をお待ちしています。

義姉の思い出

荒川　京子

「考える会」が発足してからは早くも13年の歳月がたちました。
私がホスピスと言う言葉を知ったのは今から30年前、看護師の義姉49歳を卵巣がんで亡くしたときでした。明けても暮れても痛みに苦しんだその当時のことは鮮明に覚えており、忘れることはできません。
浜松の聖隷ホスピスを作る計画中のことでしたが、先生や同僚達の「もう少しで出来るから」の励ましもむなしく旅立ちました。本人の口からホスピスに入れて、とのことでしたが私にはわかりませんでした。
これが日本で最初の聖隷ホスピス（聖隷三方原病院）だったのです。
そのことが医療・市行政に無知な私を、府中にホスピスをと、夢のような目的に向かい走り続けさせました。
私も加齢と共に行動半径も狭まり、情報交流の場も狭まりました。
17号の具体的活動内容、私なりに考えていた役員が二人加わってくださったことを一歩前進と受け止めています。活動内容を読み返し、現実に私ができることは、と考えています。

会計より会員の皆様へのお願い　　会費未納の方は払い込みをどうぞよろしくお願いします。勉強会・講演会等当日でも、郵便局への振込でも結構です。振込用紙ご入用の方は、会計までご連絡いただければお送りいたします。

会計　宇田ひさ子　042-363-9271

編集後記：ようやく涼しい日が続くようになりました。と思えば大島での災害です。今冬は厳寒が予想されています。
「病の皇帝・がんに挑む」を読みました。ご一読をお勧めします。
今回から編集委員に参加しました。不手際も多くあろうかと思います。ご容赦を。　　編集委員　武智

府中ホスピスを考える会
連絡先　駒ヶ嶺　泰秀
府中市紅葉丘３－３３－４
電話　０４２－３０２－２６０７